

京鹿子

昭和二十三年九月三日第三種郵便物認可
平成十八年八月一日発行
通巻九八四号（昭和十四年一日発行）

8月号

— 近 詠 —

今朝の秋 丸山佳子



数珠玉の今が無心に草の実で
落し文に枕ことばがうかびこぬ
二百十日波の色にも染まぬ松
洗顔す指十本で今朝の秋



おたがひに行く先つげぬ朝蜻蛉
色鳥に生きほうだいにさせる寺
女次第とこんなところに三味線草
留守安泰時計と襖絵仲良くて
山から石ぼろぼろ峠の秋に対く
戻るには遠く来すぎて草蚩

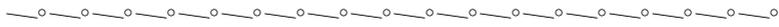


豊 田 都 峰

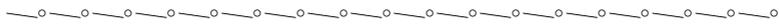
清響集 その六十四



葉 桜 の 鬨 ば かり なる 水 城 址
葉 桜 や 船 入 の 濠 持 つ 城 址
木 曾 三 川 そ の ま ま 薫 風 圈 な り き
宝 曆 の 治 水 へ 白 南 風 ま ゐ ら せ ん
治 水 成 り 青 芦 光 ま み れ なる
白 南 風 の あ ふ れ 輪 中 も な ん の そ の



絮たんぽぽこらへ川風にはのらず
御在所のひとつとんがる青葉かな
御在所は機嫌晴して青嵐
*
花苔や首塚といふ石ひとつ
苔の花恩讐いまだ刻む石
遠郭公小径はすぐに森に入る
合歓咲いて今日も湖風の圈内なる



秀華採集

綾とりの橋をくづせば父おぼろ

村田 富美子

綾取りに係わる作品はよく見かけ、去来抄にいう竈の句かも知れないが、「父おぼろ」は竈の句を抜けて格別である。類句をおそれおれば作品ができなくなる。

骨董屋覗けば黄泉の蝶がをり

柴田 朱美

朧月天保銭で払ひます

小堀 寛

ともに想いをのぼして、自分の風景を作っている点を評価したい。たまに遠く心を解き放つのもよい。前句の蝶が不思議に印象的であり、後句の舞台は江戸の下町か。

鈴鹿 仁

金剛輪寺三句

不意と謂ふ昂りのあり梅雨の蝶
かたつむり渦の向うの佛みち
本藉は湖の真ん中小鮎跳ね
一徹の啼きは風裂く梅雨がらす
花莫蔭の真中に坐る猫三匹
梅雨入りや紅きくちびる物申す
殉国の神は名将木下闇

近 詠

宇都宮滴水

青りんご

折鶴を解けば白紙に青りんご
青梅雨の燭まつすぐに阿弥陀堂
花莫蔭へ声の集る太柱
水媒の村に落ちつく花萍
千枚の田の水ごころ走り梅雨
雷雲の陣厚ければ潮も又
糸とんぼ貫ひそこねしちから水

神麓集



夏めきてベトナム生れ伽羅匂ふ
 沈香のなかまの伽羅や風薫る
 伽羅を割る工房芳し花とべら
 炎帝もじつと聞きゐるインセン
 袋角 正倉院の蘭奢待

林 日圓

夏めくや花の匂ひの夜の雨
 ふるさとは土も玲瓏聖五月
 雨のまま昏るる明るさ麦の秋
 月の暈ほのむらさきに朴若葉
 放將は遠き日の夢虞美人草

麦の秋 藤岡紫水

北の旅(1) 北村 香朗
 小綺麗に纏む雪吊修道院
 修道院の時鐘は春の風に乗り
 修道院の尖塔を過ぐ春の雲
 早春の画館夜景首すくめ
 上弦の春月の浮く露天の湯(鹿部温泉)

北村 香朗

余生にも嵐のありて花は葉に
 方向音痴花の浄土を遠くせり
 牡丹ひらく音の聞こゆる耳病めば
 花は葉に杖止めて買ふ走り餅
 放流の稚鮎頭揃へ川上る

吉田 多美

花予報 丸山 冬鳳
 水張つてダムの入江の花予報
 膝を地に五体支への枯れ掃除
 百足出て無茶苦茶ですわ利鎌薙ぐ
 句碑掃除熊手拝借枯れ除く
 躬の丈に育ちて椿蕾抱く

丸山 冬鳳

沈床花壇 森津 三郎
 櫟の譲る刻かも風気配
 楠の林にすみれ日差し得し
 地味な柄地味に着こなす花衣
 黄砂して分水嶺を低くする
 日を貯めて沈床花壇芽を競ふ

森津 三郎

神麓集



五 月 丸井 巴水
助走なく天道虫が掌を離る
土下座せし蛙の届く神のこ糸
水あらば頼りの花菜の横たはる
赤腹を可愛ゆく想ふ金曜日
落ちるほか無き噴水の自閉症

松田 都青
まだ知らぬ闇があるかも花のあと
夜桜や余生の旅の北枕
春昼や買ふて讀まざるベストセラ―
惜春の止まることなき輪転機
もう一度手を洗つてから虹に触る

兵 竝ぶ 竹貫 示虹
天と地の默契として桐一葉
星逢ふ夜人と人との橋がない
人死にし時も飯食ふ花木槿
八月や軍靴の登音近づき來
星月夜墓となりても兵竝ぶ

青春譜 北川 孝子
呼鈴を押す手眞白き花ごろも
空席を数へて坐るさくらしべ
深息のひとつ春愁ゆれてをり
本音なら耳を貸します美人葦
ひなげしの思ひの丈や青春譜

悲しき夢 川崎 光一郎
暁の目覚しの声ほととぎす
杜鵑啼いて悲しき夢醒ます
ほととぎすの声嘲笑ふ明け鴉
街の灯のモザイク模様や明易し
老鶯を娛しむ日々や佗住ひ

伊藤 希眸
尾を振つて犬の挨拶絮たんぽぽ
午報鳴り犬も声張る垣若葉
雨がつば着て犬通る走り梅雨
猟犬の息の激しさ燕くる
番犬の繋がれどうし藪蚊寄る



京鹿子集

豊田都峰選

やはり夢藤のしづくに染まりしは

少年の一直線に来る春泥

四月以降消しゴムすつかり角のとれ

綾とりの橋をくづせば父おぼろ

田水張る天をうのみにかがやけり

文豪のかつて飯炊く花の路地

挽ぎたての春満月を賞味する

骨董屋覗けば黄泉の蝶がをり

卵波濃しかなしい鮫を追ひつめて

藤房や暮しに流れ引き入れて

チエホフの葉はらりと花洛の忌

京都 村田富美子

鎌倉 柴田 朱美

奈良 小堀 寛

朧月天保銭で払ひます

片栗の花咲く町に棲み古りし

黄塵を懐しとせり持國天

鶯に去年の訛や浮御堂

霧やいまも血湧かせ三國志

健忘のややに重なり鳥雲に

テレビ画面溢れ墜ちたる鳥の恋

桜蔭踏む特攻の忌なりなり

チユーリップ傾げるをわが愁ひとす

草薙の剣か野火の横走り

春雷や祈りの中のエゴイズム

千葉 河内 桜人

伊藤 希眸